

も続けて出場しましたが、この時は体調をこわして途中で棄権しました。その後ドイツに残ってスポーツの勉強をしました。

その後、故郷の白根村に戻り、昭和4年（1929年）、3人の若者の協力を得てヨーロッパやアメリカのスポーツ施設をまね、宮城県境にあるブナ山の山頂に青少年の体力作りと健全育成をめざし、オリンピック村をつくる計画を立てました。



オリンピック村事務管理棟（1930年ごろ）

ここにはバンガロー、テニスコート、スキー場、運動広場、牧場、人工池などがあり、生家にも今でもある設計図はとても大きなものです。

オリンピック村は、若者たちの体力作りや交流の場となりましたが、戦争がはげしくなり、閉村しました。

その後、満州（今の中国東部）へわたりましたが、戦争（第二次世界大戦）が終わってから故郷の白根村に帰りました。国会議員の選挙に出たり、地域の青年を集めてマラソン大会を開いたり、私設保育所や公民館を開設しました。また、白根体育クラブの育成を行うなど、スポーツ発展のもとを作り、住民の健康増進と交流に大きな役割を果たしました。

そして、昭和40年（1965年）4月24日、故郷の梁川町白根で80才でなくなりました。現在、梁川町出身のただ一人のオリンピック選手としてたたえられ、名前をとった三浦弥平杯梁川町ロードレース大会が毎年開かれて、第22回（平成13年度）になりました。



福島県初のオリンピック選手、三浦弥平氏の功績を記念し昭和55年から開催されている「三浦弥平杯梁川町ロードレース大会」。



当時の新聞記事

- 【資料】・オリンピックマラソンランナー 三浦弥平の軌跡「走る」 佐藤 昭男 著
・ビデオ 「三浦弥平」
・三浦弥平写真集 [白根小学校 024-577-0314]